

周回遅れの映画評論

2006年12月21日

竹中 正治

「Bloody Civilization? : 映画 “Apocalypto”」



【またしてもギブソン監督は放つ超異色映画】

またメルギブソンがもの凄い映画をつくった。映画“Apocalypto”はメキシコのマヤ人社会を舞台にした歴史大作である¹。ギブソンの歴史物としてはご存知の通りイングランドに抵抗するスコットランドの伝説的な英雄を描いた“Brave Heart”、イエスの受難を描いた“Passion”がある。“Passion”がイエスの受難を題材にしなが、通常の教条的解釈を超えた異色な内容のために、賛否両論の物議を引き起こしたことは、以前私の映画評論でも採り上げた。

“Apocalypto”の異色さは、現代の私達にはほとんど未知のマヤ人社会を舞台にマヤ人の青年とその妻を主人公に描かれていることだ。現代の私達の文化・社会と大きくかけ離れた社会の住民を主人公に映画を作るというのは、それ自体大胆な冒険であろう。映画の会話では英語もスペイン語も一切使われていない。映画で使用されている言葉が当時のマヤ人の言葉とどれほど同じなのかは、私には全く判らない。観客は未知の社会の登場人物が語る異言語を英語の字幕を通じて理解するのみである。これはギブソンが“Passion”でも用いたやり方だ。アメリカで従来製作されたイエスキリスト題材の映画は、私の知る限りほとんど英語で会話が出来上がっている。しかし、ギブソンはそうした判り易くするための虚構を拒否して、アラム語で映画を作った。異なった時代の異なった文化・社会の出来事を理解しようとする時、私達はその題材と私達の間にある時間的・文化的な隔たりの大きさをまず思い知る必要がある。現代の私達とは異なった文化、

¹ 映画の舞台はマヤ社会であるが、ユカタン半島のチェチェンイツアーの巨大神殿やピラミッドに代表されるマヤ文明のピークは9世紀までである。映画の最後に判明する時代設定は西暦1500年前後である。ただし衰退したとは言えマヤの都市文明は1500年代まで存続しているの、つじつまは合う。9世紀以降のマヤの衰退に代わってティオティワカンを中心に興隆したアステカ文明は、ご承知の通り、1500年代にスペイン人によって滅ぼされる。

価値観、世界観を前提に理解しなければならない。現地語で製作するギブソンの意図はそのことを私達に伝えようとしているように思える²。

【突然襲撃されるジャングルの共同体】

“Apocalypto”は英語の“Apocalypse”であり、通常「黙示録」と訳される。だからこの映画の物語で「予言」、「兆（Omen）」が重要な意味を持つ。映画の第一義的なメッセージは比較的簡単で、物語の展開を辿れば自ずと浮かび上がる。そこでちょっと長くなるが物語りを概観してみよう（ただし映画を一度しか見ていないので、細部は不正確かもしれない）。

主人公は数十人の代々森に暮らす共同体の青年である。名前は「ジャガーの前足（Paw of Jaguar）」（以下、本文ではジャガーポーと書く）。村は狩猟で生計をたてている。父は狩猟のリーダーであり、ジャガーポーには幼い息子と妊娠中の美しい妻がいる。平穏な村の生活はある朝突然、別のマヤ人戦士らの攻撃で破壊される。抵抗する村人は殺され、若い女性はレイプされ、捕縛されてしまう。主人公はからくも女房と息子を村の外れにある垂直の深い穴にロープで降ろし、隠す。しかし、その直後に襲撃者と戦闘になり、奮戦するが多勢に不勢で、捕縛される。父は「息子よ、恐れるな」と最期の言葉を残し、見せしめのためにその場で殺されてしまう。妻と息子は深い隠れ穴に取り残される。

襲撃者の隊長は捕縛した村人達を何処かへ連行する。襲撃を受けたのは主人公の村だけではなく、周囲の複数の共同体が襲われたことが判る。連行されるのは大人達だけで、子供達は捨てておかれる。親達が連行される後を追って子供達が泣きながら後を追う。しかし、子供には渡れない大きな大河に行く手を阻まれる。川岸に残される子供達を振り返り、嘆く大人達。その大人達にむかって一番年長の娘が川岸から叫ぶ。「心配しないで！私がこの子達の面倒をみるから！みんな面倒をみるから！」私の娘と同じ位の年頃だ。ブアーと涙がこみ上げてくるシーンだ。

連行の途中、荒廃した村で一行は親の骸の前に立ちすくむ少女に遭遇する。少女は疫病に感染していた。一行に加わろうとする少女を兵士は棒で突き放す。その時、神秘的な眼つきをしたこの少女が予言的な言葉を語り始める。「太陽は隠れ、昼は夜となり、ジャガーと共に走り、泥から再生する者によってお前達に最後の時が到来する…」

【捕縛された一行を待ち受けていた恐ろしい運命】

² もっとも歴史の専門家は、この映画の歴史考証の正確さの度合いについて議論があるようだ。しかし歴史考証に照らして問題があっても、映画のメッセージが色あせるわけではない。所詮映画は虚構なのだから。

捕縛された一行は神殿のある都に到着する。そこで女性は奴隷として売りに出される。男性は全身に青い塗料を塗られ、ピラミッド型の神殿の上に連れて行かれる。彼らを待ち受けていた恐ろしい運命がようやく判る。彼らは太陽への生贄にされるために捕縛されたのだ。マヤ及びアステカでは、太陽の生命が衰えて世界が終わると言う終末観があった。そのため太陽の生命を維持するためには生贄が必要だという信仰に基づき、定期的に多数の生贄が神殿の上で生きてまま心臓を切り出された。日照りなどの自然災害があると、太陽の生命力が弱っているためだとされ、生贄の数は一段と増えたいらしい。その都市で供給できる生贄が足りなくなると、生贄を捕縛する目的で戦争、人間狩りが行われたと言われている。

捕虜はひとりずつ祭壇の上に仰向けに押え付けられ、神官が心臓を切り出した後、首を切られ、胴体と首はピラミッド神殿の階段から投げ落とされる。その度に神殿の前に集まった民衆から歓声が上がる。とうとうジャガーポーの番が回って来た。その時、異変が起こる。雲のない昼なのに太陽が隠れ、闇となった。皆既日食である。こうして少女の予言の最初の部分が実現した。

「太陽が死滅する！」と民衆、神官や王も動揺する。しかし直に日食のピークが過ぎ始め、光が少し戻り始めたのを見て、神官はすかさずに宣言する。「今、太陽は蘇る！」要するに生贄を捧げた効果で太陽は蘇ったと演出したのだ。民衆の歓呼は絶頂に達する。現代人の我々の眼から見れば、小ずるい演出でしかない。しかし、現代政治でもこうした演出はよくあることだ。特定の政策を掲げた政権が、景気が回復し始めると、特定の政策と景気回復の実証的な因果関係が不明であるにもかかわらず、「現政権の政策の効果だ」と喧伝するのと同じである。

ともあれ、「太陽は蘇った」という宣言により、生贄の儀式を続ける必要はなくなった。しかし自由にしてくれるわけではない。神官はジャガーポーを含め捕虜達を「処分しろ」と命じる。彼らは広い球戯場のような場所に連れて行かれる。球戯場の反対側には枯れたトウモロコシ畑が広がっている。主人公ら一団は2名ずつ反対側の畑に向かって走るように命じられる。勿論逃がしてくれるわけではない。走る彼らを兵士が弓矢や投槍で殺戮するのだ。しかも畑の前では襲撃隊長の息子が石斧を持って待ち構え、止めを刺す。ジャガーポーはジグザグに走り、攻撃をかわしながら畑の手前まで来るが、とうとう矢が彼の脇腹を射抜く。隊長の息子が石斧で止めを刺そうとした時、既に倒れていた同僚が襲撃者の足をつかみ、よろめかせる。ジャガーポーは自分の脇腹を貫いた矢じりをへし折って、襲撃者の喉をかき切り、矢を引き抜いて、トウモロコシ畑の中に走りこむ。畑を抜けるとハエがブンブン飛び回る窪地があった。生贄の死体が累々と積み重なったすり鉢状の死体捨て場だった。

【「俺はジャガーポーだ！」覚醒する魂】

息子を殺された隊長と部下兵士 10 名ほどが、彼を追う。死に物狂いでジャングルを逃げる主人公と追っ手の兵士らの交戦が映画後半の見せ場である。同時に村はずれの穴に幼い息子と隠れて出られなくなった身重の妻の戦いが始まる。妻は穴から脱出しようとロープを投げ上げ、岩壁を登るが途中で落ちてしまう。その衝撃で陣痛が始まり、助けもないまま、分娩に直面することになる。幼い息子が母をいたわる。ジャガーポーと妻の命をかけた二つの戦いが同時並行で展開する。

ジャガーポーは高い木の上に逃げ、いったん追っ手をまくが、そこで黒いジャガーに遭遇する。今度はジャガーに追われて逃げる。その時に追っ手の兵士と遭遇する。黒いジャガーは一瞬の偶然の交差で、主人公ではなく追っ手の兵士の一人をかみ殺す。兵士らは少女の予言を思い出して「悪い兆し (Omen)」だと気味悪がる。別の兵士は毒蛇に噛まれて死ぬ。逃げるジャガーポーは巨大な滝の上に出る。背後に追っ手が迫る。彼は滝つぼめがけて命がけのダイビングを行い、川岸に辿り着く。そこで滝の上からなす術もなく見下ろす追っ手に向かって叫ぶ。「俺はジャガー・ポーだ。この森は俺達の森だ！俺の息子もこの森を継ぐ！」

滝の上から見下ろす隊長は「滝を迂回して下りましょう」と気弱な進言をする部下を殺し、自分を含めて兵士全員に滝に飛び込み、ジャガーポーを追えと命じる。また一人の兵士がこのダイビングで岩に頭を打ち付けて死ぬ。再び逃げるジャガーポーは黒い泥沼にはまる。かろうじて沼から這い上がったジャガーポーは、真っ黒の泥で覆われた自分の体を見て、ひとつの覚醒に至る。「俺は黒いジャガーの化身だ。恐れるものは何もない。」死んだ父の言葉は、少女の予言と重なり、ジャガーポーに運命的な覚醒をもたらしたのだ。

これを契機に彼は攻撃に転じる。泥に覆われた体は蜂の針も通らない。すずめ蜂の大きな巣を見つけて、それを敵兵に投げ込む。毒蛙の毒を木の針に塗り、大きな葉を丸めて作った吹き矢にして、敵を射止める。射止めた敵の石斧で自分の父を殺した敵兵と決闘し、間一髪で倒す。追っ手は次第に数を減らした。

とうとう、ジャガーポーは自分の村に辿り着き、穴の上から妻と子供が無事であることを知る。時悪しくも雨が降り出し、豪雨となって穴が浸水し始める。このままでは妻と子は溺れる。しかしまだ 3 人いる追っ手が迫り、すぐに助けることができない。妻は水かさが増す穴で、息子を肩に載せ、岩の柱に取りすがりながら、腰まで水につかって分娩する。

ジャガーポーは村外れで追っ手の隊長の矢を肩に受ける。逃げるのを止め、対峙する彼に隊長が石のナイフを抜いて走り寄る。その時、ジャガーポーの仕掛けた狩猟用の罠に足をかけ、隊長は幾本ものやりで串刺しとなり、絶命する。かくして少女の予言は成就した。

残った2人の追っ手は隊長を殺され動揺するが、それでもジャガーポーを追って、3人は広い海岸に出る。そこで3人はかつて見たことのないものを見て、呆然と立ちすくむ。彼らが目撃したものとその含意については、これから映画を見る人のためにここでは書かないでおこう。

もはや戦意を喪失した敵2人を離れ、ジャガーポーは妻の残る穴に戻る。胸まで水につきながら、妻は両手に息子と生まれたばかりの赤子を抱えていた。この極限的な状況で夫の無事な姿を見て喜ぶ妻の懸命な笑顔が胸を打った。こうして親子4人は生き延びて村を去る。ジャガーポーが海岸で見たものを問う妻に彼は言う。「もっと奥の森に引っ越そう。そこで最初から始めよう。」彼は海岸で遭遇したものが“Omen”であると直感したのだ。。

【ギブソン監督が放つメッセージの普遍性】

この映画の直接的なメッセージは判りやすい。逆境でも生きる希望を捨てず、家族を守り、命のある限り奮戦するジャガーポーと妻の懸命さが胸を打つのである。人間の尊厳とはそうした懸命さの中で光を放つのだとギブソンは言っているような気がする。同時に、自由に生きようとする人間の普遍的な希求を砕き、家族の絆を破壊する政治権力過程が生み出す恐ろしい力への批判が含意されている。マヤ人と現代に生きる我々との間にある大きな文化的・時間的な隔たりにもかかわらず、いや、その隔たりが大きいからこそ、自由に生きることを希求し、奮戦する人間の尊厳さを描いたこの映画のメッセージの普遍性が際立つのである。

ギブソンはカトリック教徒であると言われるが、その映画はおよそカトリックの教条から生じたものとは思えない徹底的に反権威主義的、自由主義的（リバタリアンの）なメッセージを放っている。ギブソンの信条の中で、カトリック的な価値観は米国特有のリバタリアン的な変容を遂げているのであろう。

中南米歴史家の一部からは、映画のマヤ社会の描写が「生贄、捕虜、殺戮」など血にまみれたイメージに偏向し過ぎているという批判が出ているそうだ。現代の私達の一方的な視点でマヤ社会をそのように描くことは、従来から根強い中南米文明への偏見を助長すると言うことらしい。しかしそうした批判は的外れであろう。ギブソン監督の批判的

メッセージはマヤ社会を舞台にしながらも、現代の私達自身に向けられているのだ。そこにこの映画のより深層に含意されたメッセージがあるのだ。

【物語の深層に含意されたメッセージ】

太陽を衰えさせないためには生贄が必要であるという信仰・イデオロギーに取り付かれてしまった政治権力システムと、それを維持するために、際限のない生贄と人間狩りを展開したマヤ、アステカの文明。それを私達は野蛮、未開な信仰の産物と片付けることができるであろうか？黄金のために中南米現地人の虐殺と奴隷化を未曾有の規模で展開したスペインの侵略者達はマヤの統治者と同類ではないのか。黄金獲得という経済的な利害は、その道義性はともかく、「合理的動機」に見えるかもしれない。しかし黄金の価値は黄金自体にあるのではなく、それに価値を認める人々の主観的な認知から生み出されるに過ぎない。太陽の生命を維持するためには生贄が必要だと考える社会では、その主観的な認知が人々を拘束し、動機付ける現実の力となる。黄金に価値を認知し、そのためには戦争も殺戮も行う社会とその本質は同じなのだ。

あるいは、太平洋戦争末期に国土のほとんどの都市が焦土となり、数百万の国民の命を犠牲にしても最後まで「国体護持」に執着し、「本土決戦」を唱えた旧日本の統治者らは、マヤの統治者とどれほど違うのだろうか。「共産主義は悪である」というイデオロギーを抛り所にベトナムに通常兵器から化学兵器まで未曾有の大量投入を行い、子々孫々まで残る巨大な戦禍を残した米国の統治者とマヤの統治者の間にどれほどの相違があるのだろうか。 民主的選挙で統治者を選出する現代の政治システムですら、根本的な解決にならないかもしれないのだ。マヤの生贄を捧げる儀式を行う神官は、民衆の歓呼で支持されていた。数百万人のユダヤ人を虐殺したナチスの独裁権力は民主的なワイマール共和制から生まれた。この映画を「マヤ社会は血にまみれた野蛮な文明という偏見を助長する」などに見当違いの批判をする者は、自分自身の文明の血にまみれた最近までの歴史を忘却し、今日でもそうなる危険性をはらんでいることにあまりにも鈍感であると言うしかない。ギブソン監督の放つメッセージは、時代と文化の相違を超えて、今日を生きる私達に普遍的な問いを突き付けているのである。



ジャガーポーと妻のセブン

以上